

第2回北海道庭園フォーラム in とかち

環境問題に対応した 未来に繋がる庭空間づくりを創造する

フォーラム実行委員会委員長の阿部英輝氏は冒頭の挨拶で、「地球環境には緑が有効ということは皆さんも理解していると思います。今、その地球は風邪をひきかけていると言われていています。地球は命を受けて39億年余り。その間私たち人類は有益な資源と快適な生活の恩恵を受けてきました。39億年かけて作られた資源は今やひん死の状態です。このような地球環境において私たちにできることは、人と人、町と町が共に花や木を植え、少しでも地球環境に恩返しをしなければいけないということ。そして、私たち造園の領域も緑を通して、生産者と消費者、人と自然、人と人の繋がりを、環境に配慮した庭空間づくりを目指していき、緑豊かな森、土、水場があってこそ、今回のパネルディスカッションのテーマ『環(わ)の郷(さと)づくり』を遂げられると思います。地球環境の問題は、基調講演の涌井史郎教授、コーディネーターの小林昭裕教授、そして、話題を提供していただく皆さんから何らかのヒントがあると思います。それをもとに今後さまざまな視点から討論していくのが望ましいと思います。今後このようなフォーラムがさらなる発展を遂げ、受け継がれていくことを望みます」と述べた。

基調講演

ランドスケープ的視点から見るエコロジーとエコノミー

涌井 史郎 氏

造園家
桐蔭横浜大学特任教授、
中部大学研究科教授



涌井氏は基調講演で、わずか数百年の間に地球上ではさまざまな環境問題が起きていると述べ、警鐘を鳴らした。

「庭園＝ガーデンは、古代ヘブライ語の囲うという意味の“ガン”、楽園の“エデン”を組み合わせた合成語です。地球を考えると、まさにこれがガーデンだと考えます。地球を1mの球だとすると、表面の1mmが今大変なことになっていて、化石燃料の大量消費による地球温暖化や農業と貧困という問題に直面しています」と述べ、このような問題が起きた原因として、「エコロジーとエコノミー、そもそもこの2つは共同体における心理の姿であるはずが別々の道を選んで歩んでしまった。その結果、統合しようとしなければいけない条件におかれています。自然は人類にとって生存そのものでしたが、1万年前に農業革命が起きます。農業革命により自然資源が経済という側面を持つようになります。その後、300年前に産業革命が起り、自然は経済のカテゴリーに取り込まれることになり、自然の景観が特異な形でしか見出せない状態になりました。その後、人類は施設環境の中で生活するようになってしまい、地球環境にダメージを与える結果になります。その原因は人口の増加にあり、3000万種の生



物に影響を与えることに繋がりました。現在では1日に100種の生物が絶滅しています。他の生物と比較し、人間だけが増えることに関しては無神経で、人間が絶滅の方向に走っていることを意味します。元来日本人は、都市と農村と自然が都市を支える存在であることを認知し秩序を守ってきました。しかし、それらは自然のもつ生態系サービスの供給基地から宅地余力地に変貌してしまいました。その結果として、地球の平均気温は0.6℃、日本の地方の平均気温は1.0℃上昇。それに対してヒートアイランド現象の著しい東京を含む大都市圏は2～3℃の上昇をみています」と述べ、このような危機的状況に私たちはどのように対処すべきかということについては、「これからの世界は、社会と経済と環境がバランスをとることで持続的なものとなることに認識が一致しています。自然と共生する社会の構築が必要です」と述べた。

また、造園・ランドスケープ的観点からこの環境問題を見ていくと、「日本人が身につけてきたものは、自然生態系と農業の共存であり、それがモザイク的なランドスケープを形成し、自然生態系保全の効果というものを農業に認めていこうという方向が出てきた。“いなし^{*1}”の景観として、全国各地の棚田や防風林を見てみると、自然と対話し自然をいなすという技術を身につけてきました」と述べ、そして「今後、庭園を作るうえで重要なことは、農村、農業、生態という3つを同じ括弧でくくって議論をする社会を実現できるかどうか。ここにかかっているとんでも過言ではありません。さらに日本庭園の持っているビオトープ^{*2}の効果にも着目しなければいけません。さらにゲオトープ^{*3}という考え方を持つことも重要です。小さなビオトープと国や地域にまたがるゲオトープ、この両方が共存できるエコロジカルな社会、ガーデンアイランドとしての日本列島をどう回復するか、これが非常に重要なテーマになるでしょう」と結んだ。

今回のフォーラムでは4つの事例報告が発表されたが、その前段の説明がパネルディスカッションのコーディネーターである専修大学北海道短期大学・みどりの総合科学科教授の小林昭裕氏からなされた。

「今回は“環の郷づくり”についてお話をさせていただきます。まず一つ目ですが、帯広市が環境モデル都市に指定されたということが、環の郷づくりにおけるひとつのテーマになります。帯広市は10年ほど前から『帯広エコシティ』という題目で、生態系の多様性を保持しながらそこにさまざまな付加価値を持たせていこうという提案をしています。二つ目は、持続可能な社会を目指すための条件としての環です。わかりやすく言いますと『物質のリサイクル』です。三つ目は、人は人と人との繋がりの中で自分の存在を確認するという本質的なコミュニティーの再構築です。四つ目は、現在不登校、ニートなどさまざまな患者が増えています。そういった問題に緑を通した『心のケア』を学問の領域を超えながら進めていくことが大切なのです。このような観点から事例報告を聞いていただきたいと思います」

事例報告 1

「花いっぱい・虫いっぱい」

豊かな自然を復活させたい

帯広市立森の里小学校 教諭 西川 みゆり 氏
 4年 田端 華恵 さん 4年 杉山 太一 さん
 6年 河合 健斗 さん

学校が建てられたとき、小さな林が校地内に残されました。しかし、数年ですっかり荒れ果ててしまいました。それをかつての豊かな自然に復活させたいと活動は始まりました。これまでどんな取り組みをしてきたのか三つの活動に分けて紹介します。一つ目は、自然を豊かにする活動です。内容は外来種の駆除・在来種の復活・生き物が住める環境づくり・人工池の作り直しです。二つ目は、在来種を復活させる取り組みです。四つ目は、いろいろな生き物が住める環境づくりの活動です。それらの活動によってできた自然で、各学年、ビオトープの自然を観察したり調べたりする学習をしています。6年間の活動を通して、ビオトープで見られる生き物が増えてきました。「私たちの宝物は、この豊かな自然です」と胸を張れるように、これからも活発に活動を続けていこうと思います。

※1 いなし（居做し）
住居のさま。すまいぶり。

※2 ビオトープ（Biotop独）
生物群集の生息空間。「生物生息空間」。語源はギリシア語からの造語で「bio（いのち）+ topos（場所）」。

※3 ゲオトープ（Geotop）
地学的場所性。地形や土壌、水文、気候などを合わせて分類した地学的に最小な空間。

事例報告 2

このみち

栗山町立継立中学校 高橋 慎 氏

栗山町は農業地帯で、市街地と奥山の間にハサンベツ川という小さな川があります。その流域で行っていることを紹介したいと思います。まず、この場所をどのようにしたらよいかということを地域住民と話し合うことから始まりました。これはひとつの考え方ですが、「この場所であれば、自然に手を加えるのではなく、そのまま放置する」と言ってよいのは写真だけという時代ですから、その中であえて私たち栗山町は、もう一度この地域を小さな農村地帯のように再現しようということになりました。実際の活動に関しては、事業計画・推進・活動、そのための知恵や労力・資材・資金までも自分たちで生み出し、持ち寄ろうとなりました。そういった中で、田んぼやそば畑、小川、湿原を作りました。こうした活動をしてきたことで、私たちにうれしい贈り物がありました。近隣の森（50ha）等の寄贈、北海道新聞「北のみらい賞」受賞、道州制モデル事業による支援等です。これで私たちの活動は終わりではなく、続くのです。

事例報告 3-1

北の大地にふさわしい庭園文化

高野ランドスケーププランニング 赤嶺 太紀子 氏

「宮ノ丘幼稚園物語」

もともと幼稚園の敷地には草原と水辺（流れ）がありました。このような環境を持っていたところに新しく園舎を立て替えるということで、隣の敷地を取得しました。そこからこのプロジェクトはスタートします。まず、私たちは「幼稚園を核としたコミュニティー」を形成したいと考え、さまざまなワークショップを行いながら計画を進めていくことにしたというのが、このプロジェクトの特色です。「計画ワークショップ」で計画を固め、それをもとに森の環境整備などの「実践ワークショップ」を行い、加えて自力建設ワークショップというも行いました。このように、自力建設に取り組むにあたって、場所との主体的な関わり、

工事では対応できないきめ細かな空間づくり、試行錯誤の中から身につく知恵や技術、また、コミュニケーションの世代間交流、達成感・充実感・自己満足とその先への要求や継続するモチベーションと成長し続ける空間、以上のようなことを生み出すことができると考えています。

事例報告 3-2

「十勝千年の森」

高野ランドスケーププランニング 高野 文彰 氏

ヨーロッパでは森が失われるのに1000年という時間を要したのに、十勝ではなんと25年で森が失われてしまいました。私たちはこのプロジェクトを始める前に、北海道の自然がどのように変わってきたかをいろいろ調べてきたのですが、これは大きな驚きでした。本当にこれから先、このままでいいのかとの思いが、このプロジェクトのそもそもの始まりです。「十勝千年の森」の目指す方向としましては、環境共生型のリゾートのあり方を目指すべきではないかと提案しました。このプロジェクトの展開では農業、エコツーリズム、森づくり、教育を4本の柱としました。デザインでは、基本的には森から何も持ち出さない、持ち込まないことを前提に考えました。ここで試みたのは、引き算のデザインかなと思います。その土地にある不要な物を取り除き、土地の持っている潜在的な力をうまく引き出すことによって、魅力が増すのだと思います。このプロジェクトで、北海道独自の庭園文化というものがようやくわかり始めてきた気がしています。

*

フォーラムの後半には、小林昭裕教授をコーディネーターに、パネリストには事例報告の西川教諭、高橋氏、高野氏に加え、北海道造園組合連合会理事の廣澤清隆氏によるパネルディスカッション「環の郷づくりにむけて」が行われ、フォーラムを締めくくった。